



エッセイ

地域日本語教室と居場所について

母語とつながり、「子どもの気持ちが落ち着く場」を作るために

北村 名美 *

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

「今日も様々な言語が教室から聞こえてくる!」私はいつもそう感じながら他県の地域日本語教室に参加する。電車で揺られながら、今日のJSL生徒たちの様子はどうだろうか、高校は楽しく通うことができているのだろうかなど様々な思いを巡らせながら日本語教室へ向かう。JSL生徒たちは元気にお喋りする時もあれば、大学受験やJLPTが近づくと急にいつものはつらつとした様子が見られなくなったり、そもそも日本語教室に来なくなったりなど、その日によって多様な教室の様子が見られる。

ここで、私と地域日本語教室の関わりについて少し紹介する。私はA県内のJSL高校生を支援する地域日本語教室において、日本語スタッフとして携わり2年が経過する。大学の先生の紹介により参加し始めた地域日本語教室の日本語指導には、大学院在学中から現在に至るまで継続して携わっている。生徒は高校一年生から三年生まで、来日年数は1年未満から3年前後の多様な言語・文化を持つ生徒たちが同じ教室で学んでいる。指導時間は、午前中2時間、午後2時間行われ、私は午前中の指導に参加している。生徒が背景として持つ国は、中国が最も多く、ネパールや、フィリピン、また「ダブル」の生徒もいることから、1つの教室に多様な言語・文化を持つ生徒たちが共に学んでいることがわかる。地域日本語教室は自由に出席することがで

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科修了 (Eメール: nami_kitamura@fuji.waseda.jp)

き、部活やアルバイトで忙しくなる生徒が一定数いることから、固定の生徒に日本語指導を行うというよりは、その日に参加している生徒を一对一、または複数人（生徒3対スタッフ1など）を担当することが多い。教室には中国語を母語とする JSL 生徒が8割を占めていることから、人数の関係で私は自然と中国にルーツを持つ生徒たちを担当することが多い。一方、大学受験が近づくと、私が英語教員免許を所有していることから、国籍問わず英語学習を希望する生徒へ英語指導を行う機会が多くなる。

2. ある日①—— 学校生活への素直な思い ——

4月末のある日、私は、中国語を母語とする女子高生3人の日本語指導を担当した。この日は、日本語スタッフより生徒の方が多かったため、日本語レベルが同じくらいの高校一年生3人を担当することになった。3人は来日1年未満であり、2人は同じ高校に通い、1人は違う高校に通っていた。3人はお互いをあまり知らない様子だったが、3人とも母語が中国語のため、すぐに打ち解けられた様子だった。毎週担当する生徒が異なることから、私は、最初のラポール形成が非常に大切だと考えている。そのため、3人に自己紹介してもらうだけでなく、私がどんな先生なのかをできるだけわかりやすく伝えたり、少しずつだが勉強している中国語も交えたりしながらできるだけ早くラポール形成しようと努めた。私のたどたどしい中国語で3人の笑みが増える様子も見られ、互いに打ち解けて日本語指導を始めることができた。

日本語指導をする中、分からない単語が出てきた時は、私に聞くだけでなく、3人で教え合いながら日本語指導を進めた。私の考えとしても本教室の考えとしても日本語だけでなく、生徒たちの母語も尊重している。なぜなら私は、彼らの母語は生まれてから現在そして未来を創る養分であると考えているからだ。そのため、分からない単語がある時は、翻訳機を使うことや、ある程度母語で他の生徒に聞くことも良しとしている。この日は、指示詞「こ・そ・あ・ど」を一緒に勉強し、3人は「難しい」「大変だ」と言いながらも一所懸命練習問題に挑戦し、いつのまにか休み時間になった。10分間の休み時間でも、私は JSL 高校生と積極的に関わるよう心がけている。彼らの休む時間は確保しつつ、趣味の話、学校での様子などを話しながら、本教室における様子だけでなく、それ以外の場面での姿や背景についても知っていこうと心がけている。なぜなら彼ら一人ひとりの背景や個性を知ったうえで日本語指導を行うと、それが個別最適な日本語指導につながるからだ。10分間の休み時間が終わり、日本語の勉強を再開した。教科書は開いている

ものの、休み時間前とは違う様子で、3人とも何かソワソワした様子を見せた。私はどうしたのかと思いながらも、集中力が少し切れてしまったのかもしれないと考えながら、様子をうかがっていた。しかし、勉強しつつも、3人は一つの話題について話している様子であった。私が「どうしたの、何かあった」と尋ねると、1人だけ違う高校に通う生徒（以下、ナナさん（仮名））が、学校に馴染めないこと、学校にいる日本人の生徒たちと上手くいっていないことを打ち明けた。

学校に馴染めないという悩みから、ナナさんは、自分と違う高校に通う2人に学校の様子や日本人生徒とのかかわり方について聞いていたようだ。私は事態の重要性を察知し、休み時間にナナさんと二人で学校に馴染めない理由や担任の先生への周知の有無について話すことができた。2人で話した後、ナナさんは少し落ち着いた様子を見せ、日本語指導終了後には、いつもの元気な様子に戻り「なみ先生、さようなら」と言った。指導終了後、ナナさんが通う高校に他の日本語スタッフがメールと電話をすることでナナさんから聞いた学校での状況を報告することができた。現在は、ナナさんの通う高校の日本語指導員が、ナナさんの学校での様子を観察・サポートしている。また、担任の先生や管理職とも連携しながらナナさんを含む JSL 生徒たちを見守っているようだ。

3. ある日②——進路への悩み——

12月のある日、あるネパール人 JSL 生徒（以下、フィくん（仮名））の受験英語指導を一对一で担当した。フィくんは高校1年生の4月当初に本教室に参加していたが、部活が忙しくしばらくの間教室には来ていなかった。しかし、部活引退を機に、再度地域日本語教室に参加し始めた生徒である。

彼は高校3年生で大学受験が2か月後に迫っていた。いつもならラポール形成のため、趣味の話や学校での様子について話すのだが、緊張と不安そうなフィくんの表情を見て、すぐに英語の過去問を一緒に解くことにした。フィくんは英語での「話す」「聞く」力は十分高いが、「読む」「書く」力が十分に伴っていないため、受験英語で伸び悩んでいた。得意な英語に対して自信を失っている様子が見て取れた。ゆえに、私はフィくんと英語で話しながら過去問を一緒に解いたり、問題の解き方を話し合ったりした。最初は過去問について話していたが、少しずつ信頼関係が形成され、私と英語で話せることへの安心感も相まって、受験・入学後の費用面の悩みがあることを打ち明けてくれた。この会話は短時間ではあるが、二人の関係性の中で築かれたものであり、私はフィくんの悩みを少しでもサポートするために、奨学金や地方自治体の援助について

日本語スタッフから様々な情報を教えてもらい、フィくん伝えることで彼の不安の解消へ繋げることができた。フィくんが通う高校は就職する生徒が多いため、なかなか学校の先生には受験の金銭的な悩みまで相談できなかったことを後から話してくれた。

フィ君は第一志望とはならなかったが無事に大学に合格し、現在は私たちと一緒に、本教室に大学生ボランティアスタッフとして JSL 生徒たちのサポートに携わっている。

4. 地域日本語教室の意義について

地域日本語教室とは JSL 高校生たちにとってどのような場所なのだろうか。

私は、2年間地域日本語教室へ参加した経験を通して、本教室は、JSL 高校生たちにとって気持ちを落ち着かせて主体的に学びに参加できる場であると考えた。何よりも地域日本語教室はそうあるべきだと私は考える。地域日本語教室は強制されたものではなく、自分が学びたいと感じた時に参加することができる。参加するといつも誰かが出迎えてくれる。参加すると、いつでも自分が話したいことばで話すことができる。参加すると、様々な背景を持つ友達や先生と出会うことができる。このような場の形成と維持が、JSL 高校生たちの学びを支え、学びに貢献できると考える。ある日①では、違う高校に通っているが、本教室で出会った中国語を母語とする生徒同士で仲良くなり、今までは相談できなかった悩みなどを打ち明けることができた。私は、地域日本語教室で生まれたやり取りで、ナナさんの学校での悩みが可視化され、彼女の不登校や退学を防ぐことができたと思っている。また、指導終了後には、元気な様子に戻り「なみ先生、さようなら」と挨拶した彼女の様子から、地域日本語教室への参加が彼女にとって気持ちの安定にもつながったと言えるだろう。ある日②では、フィくんは就職する生徒が多い高校に通うため、学校の先生には進学のコネ銭面の悩みまで相談できずにいたが、自分の「存在」が認められる環境で、現在の自分に必要なことを見つめ、それを自分のことばで他者に伝えられたことで必要なサポートを得ることができ、表情が和らぐ様子が見られた。

5. 日本語スタッフとしての私

地域日本語教室で働き始めた当初、ラポール形成が非常に難しかったことを今でも覚えている。彼らにとって、私は高校の先生でもなく、彼らが背景を持つことばを上手に話せるわけでも

ない。そのため、私自身、日本語を指導することにあまり自信がなかった。指導当初は、上手く伝えたいことが伝わらないとき、英語の単語を使ったら伝わるかなと思い非英語圏の生徒にも英語の単語を使用して何とか伝えようとしていた。しかし、「なみ先生はすぐ英語を使う」と言われたことがあり、日本語指導の難しさを感じた。JSL 生徒と信頼関係を形成するために、たどたどしいが生徒の母語を頑張って予習し彼らの前で話したとき、生徒たちは自分の母語を大切にしてくれていると感じたのか、すぐに打ち解けたこともあった。彼らの母語を彼らに話したとき、彼らが日本語で話すときの気持ちがよく分かった。慣れない言語の一言を言うだけでこんなにも緊張するのかと感じた。しかし、学ぶ言語に慣れれば慣れるほど、使ってみたいという気持ちが生まれる。彼らの緊張する気持ちをほどこし、日本語を使ってみたいという気持ちにさせるためには、スタッフと生徒との信頼関係作りが非常に重要であると学ぶことができた。

6. さいごに

地域日本語教室は、「自由な個人が自分の意思で自由に参加したり参加しなかったりすることができる場」という認識も重要だと考える。学校や、部活、友達関係、アルバイトと同様に、地域日本語教室も彼らにとって一つのコミュニティであり、彼らが参加する時はいつでも私は私のまま理解され認められているという感覚をつかめることが重要だと考える。このような感覚は、「アイデンティティの感覚」(岡田, 2007)とも言われており、私は私のまま理解され認められているという感覚を掴めて初めて、生徒たちが自分自身の気持ちを安定させて主体的に学びに向かうことができると思う。そして、そのような学びの場を築くために、日本語スタッフの私ができることは何だろうかと思えず考えている。現在の私が考えることは、私の今まで培ってきた経験や学び、そして持てる時間を最大限費やしていくことだ。そして、私や地域日本語教室で支援に携わる先生方の日々の積み重ねが社会にさらに広がっていくことによって、地域日本語教室の存在について関心を持たれる方がひとりでも多くなることを願っている。

文献

岡田努(2007).『現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像』世界思想社.